編集長から

ブレインバンク（脳バンク）をご存知ですか

増田　一世

私は，最近「ブレインバンク（脳バンク）」の存在を知った．分子生物学的，組織病理学的に精神疾患の病因・病態研究を行う事業だそうだ．７月10日（日）にパネルの会で「結婚生活を維持する」というテーマでパネルディスカッションを行うので，やどかりの里のメンバーでそのテーマで話せる人を会津若松に派遣してほしいという依頼を受けたことがきっかけである．

パネルの会は，福島県内の精神保健福祉に関係する人々によって構成されている会で，最新の精神医学・精神科医療を知ることを目的にしている．名称の由来は，パネルディスカッションを行うから「パネルの会」で，今年で６回目の開催となる．このパネルの会をサポートしているのが，福島県立医科大学医学部神経精神医学講座内精神疾患死後脳バンクである．会長は丹羽真一教授．

この脳バンクは，臓器移植のように生前に死後に脳の提供を登録するシステムになっている．研究を進めていくのには，厚生労働省の充分な助成もなく，財政的な困難もあるという．2005年3月末の登録者数は健常者35名，患者32名と報告されている．

この研究を進めるためには，障害のある人自身が自分の病名を知り，提供について自ら決定することが肝要である．もちろん家族の承諾も必要だ．パネルの会はバンク事業の発展を視野に入れた会だが，その推進のためには，まず精神障害者をとりまく環境の改善・整備を目指し，パネルの会を開いている．

精神疾患の病因はいまだ究明されていない．脳の病気であるということは，ある程度知られてきてはいるが，「心の病気」と説明されることも多い．私は，この福島医大の「精神疾患死後脳バンク」の取り組みがもっと多くの人たちに知られている必要があると思った．長く付き合っていかなくてはならない疾患であり，病気を体験した人自身が，自分の疾病について正しい知識を持つことは必須だ．そして，医療的なケアで改善する問題，その人を取り巻く環境を整えることで改善する問題を整理していくべきなのではないかと思う．精神障害のある人たちは，医療と福祉のサービスを必要とする．そのためか，医療と福祉の切り分けがとても曖昧で問題がある．

関係者が疾患についての理解を深めるとともに，精神疾患についてわかりやすく社会全体に伝えていく活動も重要だ．企業で働いている人，学校に通う人たちが，統合失調症の兆しを覚えたときに，「もしかしたらこれは……」と思えて，「治療が必要，休養が必要」と理解し，生活の工夫ができるようになれば，ずいぶんと統合失調症についての社会の見方は変わっていくのではないか．

そして，この取り組みは精神科医療の中に真に「患者中心の医療」が実現すること，研究の過程に患者自身が参加し，開かれたものになっていくことが必須であることを強調しておきたい．